

駒場苗圃，代々木演習林，田無苗圃 ——演習林田無試験地沿革史補遺——

根岸賢一郎*・八木喜徳郎**・丹下 健***

Nursery at Komaba, Yoyogi University Forest and Nursery at Tanashi
—A Supplement to the History of the Tokyo University
Forest Experimental Station at Tanashi—

Ken'itiroo NEGISI*, Kitokuroo YAGI** and Takeshi TANGE***

I. はじめに

田無試験地の沿革については，東京大学演習林創設百周年を記念しての記載がある¹⁰⁾。記述は，農学部が駒場に所在した農科大学時代に始まり，次いで試験地の前身である林学科田無苗圃時代に触れたあと，主要部分である試験地時代に進んでいる。しかし，時代が古くなるほど内部資料が乏しく，また，執筆当時は文献探索の時間的な余裕が少なかった。このため試験地となる以前，とくに駒場時代については，記述が簡単に過ぎるだけでなく，誤解を生じかねない部分もある。

その後，各年度『東大一覧』（東京大学史史料室所蔵）や，林学科，とくに林学第二〔造林学〕講座に関係する野外施設についての雑多な文献を，折々に閲覧する機会をえた。これらの資料にもとづき，試験地以前の関係施設の変遷，利用状況，駒場から田無への移転，演習林との関わり，などにつきまとめる（図-1）。

* 東京大学農学部附属演習林，1989年停年退職

The University Forests, Faculty of Agriculture, The University of Tokyo, retired in 1989 under the age limit

** 東京大学農学部附属演習林田無試験地，1991年停年退職

Experimental station at Tanashi, The University Forests, Faculty of Agriculture, The University of Tokyo, retired in 1991 under the age limit

*** 東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林研究部

Research Division of the University Forests, Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo



図-1 各施設の所在地

II. 駒場苗圃

—林木苗圃，林木見本園，見本林，代々木演習林など—

1. 造林学関係野外施設の概要と変遷

『東大一覧』は、大学自体の編集による印刷物で、大学の概要を全体および各分科大学→学部、研究所別に記載している。時代とともに『帝國大學一覧』→『東京帝國大學一覧』→『東京大学一覧』と改題し、明治、大正年代には毎年、昭和年代には数年おきに、明治19年度から昭和45年度まで発行された。以下これを主にして、造林学関係（一部林学科全体を含む）野外教育研究施設の概要と変遷をたどる。

駒場の東京農林学校を帝国大学に合併し、帝国大学農科大学が設置されたのは1890/明治23年6月で、『東大一覧』への掲載は同年12月27日発行の『帝國大學一覧 従明治二十三年至明治二十四年』（以下『M23/24年東大一覧』のように各年一覧を略記する）が最初となる。農科大学に関する記事の内容は、明治23学年度の教職員名、カリキュラム、卒業生名、および明治24学年度の学年暦で構成され、施設などには触れていない。

施設の記載は、1894/明治27年1月8日発行の『M26/27年東大一覧』から始まり、「林学科実習用として本学内に6町歩余の苗圃と安房国長狭郡清澄村に272町歩余の林地がある」との簡単な記述がある（原文は付表-1参照、以下同じ）。この前年の一覧から農科大学構内図が付けられるようになる（明治25年構内図は百年史資料3に再録²⁸⁾）。図-2のように上記の「苗圃」地は、当時北側にあった正門附近、植物学教室管理の植物園に隣接する西側部分、構内の最南端部分、その他に分散していたようである。

なお「清澄村の林地」は、のちの千葉演習林である。その正式な発足は、1894/明治27年11月

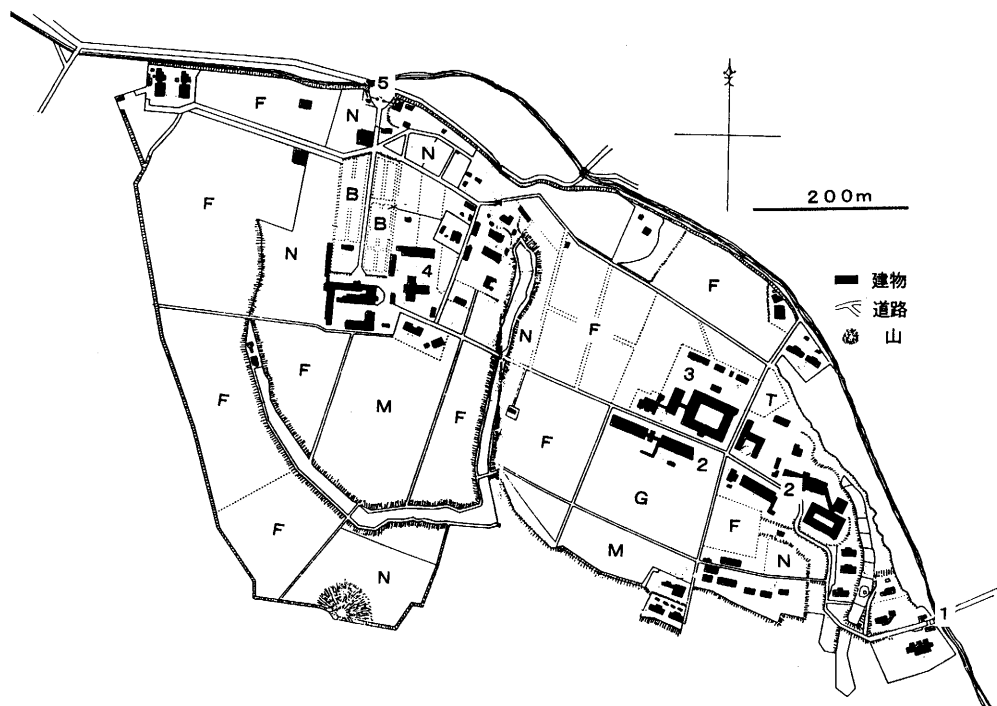


図-2 農科大学構内図 駒場 1892/明治25年(農科大学略図²⁸⁾を改変)

1 通用門, 2 寄宿舍・食堂, 3 獣医学教室, 4 各科教室, 5 正門, B 植物園, F 畑地, G 運動場, M 桑畑, N 苗畑, T 茶畑

29日、文部省用地336町歩余の移管を受けてである。大学の印刷物に、その1年近くも前に記載されたのは異例な感じがするが、むろん内定があつてのことであろう。当時の農科大学内には「経費がないから大きな山や原野をもらつても困る」との声が強く⁷⁾、こうした状況下、演習林設置に向けての早手回しの掲載とも考えられる。

1892/明治25年末、本多静六助教授(のち林学第二[造林学]講座担任教授)が、清澄に演習林の設置を提案してから1年ほどしか経っていない。短時日で内定の段階に達したのは、東京大林区署長兼務の志賀泰山教授や、林学に深い理解があつた濱尾新総長の尽力によるものと思われる。林地面積272町歩余は、明治26年に清澄官林で行われた乙科生徒の測量実習⁴³⁾による数値のようで、その後、移管時までには区域が拡大されたのであろう。

1896/明治29年12月18日発行の『M29/30年東大一覧』から、教育研究施設の説明が詳しくなる。「苗圃」の内容が「林木苗圃, 林木見本園, 見本林」に分けられる。「林木苗圃」1.3町歩では、清澄山林への植樹用として内・外国産樹種合計240種類以上の養苗が行われた。「林木見本園」1.4町歩には、内・外国産有用樹種合計140種類以上が植栽された。「見本林」には、付表-1にあげた18樹種などの小林分が造成され、保育試験などに供された。各樹種0.1-0.2町歩の規模であるが、総面積は記載されていない。また「林学科列品室」の項があり、植樹用などの林

業用具 70 余点を展示と記述されている。

この時代、新宿方面に開く正門から南へ延びる道路の両側には、植物学教室所管の「植物園」1 町歩があり、分科植物園と有用植物園に分かれていた。各学科の建物の大部分がこの附近にあり、上記の列品室は林学関係の教室か、あるいは標本陳列所にあったと思われる（図-2）。

「清澄村の林地」は「房州清澄山林」の表題のもとに別記され、地況、林況、15 林班に区画しての施業案にもとづく植伐、などの説明がある。わずか 2 ページに過ぎないが、大学の印刷物に登場した最初の演習林概要であろう。設置の当初から林学科内部では「演習林」の名称が使われていたが^{1, 44)}、対外的には「清澄山林」であった。なお上記の施業案は、明治 30 年編成の「清澄山林施業案」と思われる。その一部分の「乙之部」が千葉演習林に保管されている⁹⁾。

西ヶ原にあった東京山林学校が駒場に移り、駒場農学校と合併して東京農林学校となったのは 1886/明治 19 年である。わずか 10 年の間に、野外における林学の教育研究施設の整備が、相当に進んだと言えよう。

1897/明治 30 年末、清澄山林に奥山官林が加わり、千葉演習林の面積は現在に近くなる。翌 1898 年 7 月 20 日、東京帝国大学官制に演習林の条項が追加され、林学科と演習林は別の組織に分かれる。『M31/32 年東大一覧』では「房州清澄山林」の表題が「千葉県下演習林」に変わる。

1899/明治 32 年 10 月、北海道演習林が創設された。『M32/33 年東大一覧』から、演習林についての記述の表題が「農科大学附属演習林」となる。

1902/明治 35 年 9 月、台湾演習林創設の直前、代々木、府中の小規模演習林が、民有地を購入して設置された。この二演習林の設置の理由について『M35/36 年東大一覧』は、「駒場構内の林学実習用地が狭くなったため」としている。「代々木演習林」4 町歩は駒場に近いが、「府中演習林」15 町歩は駒場から直線距離で 20 km ちかく離れている（図-1）。しかし、いずれも駒場構内の延長と考えられ、既存の林学科林木苗圃、林木見本園、見本林を補う教育研究施設として、代々木演習林では見本林、府中演習林では小規模試験林の造成が進められた。

農科大学では 1898/明治 31 年に建物火災があり、これを機に、従来西側部分に集中していた各学科建築物を東側へ、東側部分にも散在していた圃場類を西側に集中することになった（図-2, 図-3 比較参照）。上記の二演習林の新設は、こうした整備計画の進行下のことである。なお、渋谷方面の市街地の発展に対応して、構内東端の通用門を南に少しずらして正門とし、新宿方面に開いている従来の正門を通用門（裏門）とした。

1904/明治 37 年夏、林学教室が竣工、その二階には「林学科列品室」が設けられた⁴⁶⁾。また、通用門（旧正門）附近に位置する「林木苗圃」内に、このころ、造林実習室、器具室が新築された⁴⁵⁾（図-3）。

1914/大正 3 年 1 月 15 日発行の『T2/3 年東大一覧』では、「林木苗圃」の記載が付表-1 のように、かなり改められた。苗圃で扱う樹種数は増えたが、それらは教育研究用で、千葉演習林へ

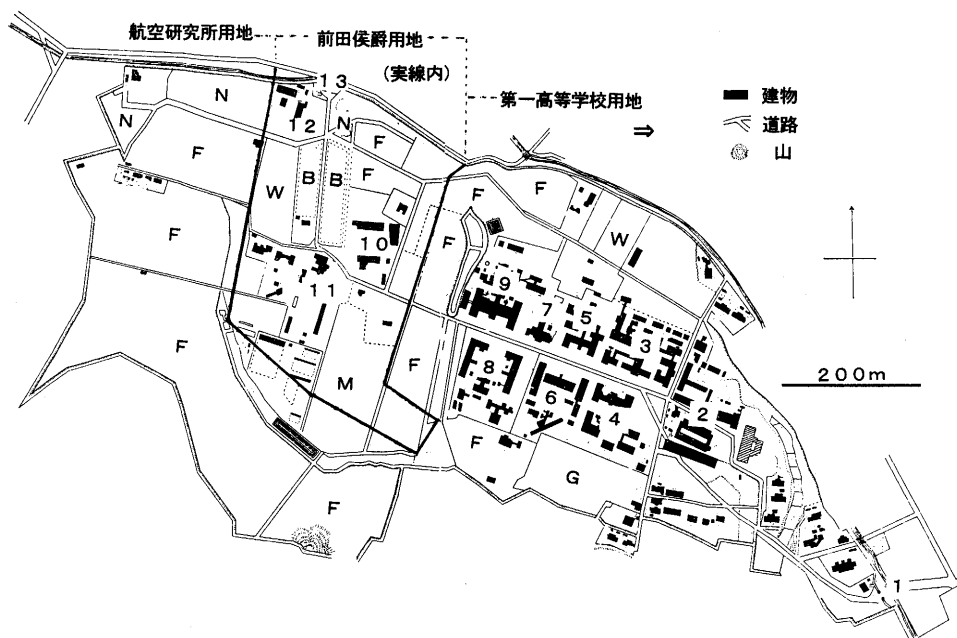


図-3 農学部構内図 駒場 1927/昭和2年（農学部建物配置図³⁰）を改変）

1 正門, 2 寄宿舍・食堂, 3 獣医学教室, 4 林学教室, 5 植物学教室, 6 動物学教室, 7 物理学教室, 8 農学教室, 9 農芸化学教室, 10 農業教員養成所, 11 農場事務所, 12 造林実験場, 13 通用門, B 植物園, F 畑地, G 運動場, M 桑畑, N 苗畑, W 林

の造林用との語句は削られた。なお、上記の実習室、器具室のほか、外国産樹種鉢置場の存在が記述されている。また、代々木、府中演習林の整備が進んだ。この年の二演習林の内容説明（付表-1）は、その後の大学沿革史に引用されることになる^{20, 30, 35}。明治年代末/大正年代初めのころに、駒場における造林学関係野外施設の整備は一段落したと考えられる。

『T8/9年東大一覧』から駒場構内の「見本林」の記述が消える。林木の成長にともない見本林の役割発揮が困難になったのであろうか。その代替とも考えられる代々木演習林の見本林は、そのまま維持される。その他の施設も大正年代末近くまで、大きな変化なく推移したと思われる。

1924/大正13年9月、東大と一高のあいだで敷地交換の文書が調印され、農学部の本郷移転が確定する。くわしい経緯は後述するが、駒場には一高のほか、航空研究所と前田利為侯爵邸が移転してくることになる。駒場の造林学関係野外施設は、北西部に集中しており³⁰、昭和年代初期に造成が始まる航空研究所および前田邸用地内に含まれることになる（図-3）。

1926/大正15年9月、新潟県森林組合連合会から見学の希望があったが、「駒場苗圃は本郷移転で廃止、見学の価値なし」と回答している（千葉演習林往復文書綴大正十五年度）。農学部の主体が駒場から本郷へ移るのは、1935/昭和10年である。しかし、林木苗圃、林木見本園、見本林（代々木演習林）の各施設は、それより10年も早い大正年代末に、移転に向け機能を停止することになる。これらの施設が田無に移り機能を再開するまでの5年間ほどは、学内最寄りの造林学

関係野外教育研究施設が、ほぼ空白の期間を迎えることになる。

なお府中演習林は1935年まで存続する。この演習林は前述のように、代々木演習林とともに、駒場構内の延長として設置された。しかし地理的に離れており、教育・研究面での役割に差があったようなので、以下の記述では触れず、別項にまとめる。

2. 教育面での利用

まず林学科カリキュラム¹⁷⁾に沿って、本科学生および乙科→実科生徒に対する教育利用の状況をたどる。ついで、その他に対する利用として、篤志林業夫→林業実地見習の研修などに触れる。

本科学生：農科大学設置時の1890/明治23年制定、および2年後の1892/明治25年改正の学科課程まで、林学関係の実習科目は「実地演習」の名称で一括表示されている。ゆえに、造林学関係実習だけの特定はむずかしい。

1895/明治28年改正の学科課程から、科目名に「造林学実習」が登場する。当時は学年制で、各学年は第1期(9月11日～12月24日)、第2期(1月8日～3月31日)、第3期(4月8日～7月10日)の3学期で構成されていた。造林学実習は第1学年と第2学年の各第3期に毎週1回実施となっている。その後、1908/明治41年と1915/大正4年に学科課程の改正が行われたが、上記の学年・学期・時間配置は変わらなかった。

1919/大正8年に学科課程は学年制から科目制へ移行し、学期が年間3学期から、秋(9月11日～翌年1月31日)、春(2月1日～7月10日)の2学期になった。造林学実習は春学期に毎週1回の実施となり、それまでに比べ、総時間数は多少減ったと思われる。1921/大正10年、秋・春学期制から夏(4月1日～10月31日)・冬(11月1日～翌年3月31日)学期制への変更があり、造林学実習は夏学期に毎週1回となる。この学期・時間配置は、その後も続き、現在にいたる。

乙科のちの実科生徒：乙科では本科にくらべ実地教育に重点がおかれた。農科大学発足時の学科課程の科目に「栽培実験」があり、第1、第2学年には通年、第3学年には第1、第2期に、いずれも毎週4時間実施となっている。

本科に「造林学実習」が登場した1895/明治28年改正の学科課程では、乙科にも「造林学実習」が見られ、第1学年の第3期、第2学年には通年、第3学年の第1、第2期の実施となり、「栽培実験」の科目名は消えている。

乙科は1898/明治31年に実科と改称し、教授内容の改善や実習教育偏重の是正などが図られた。このとき制定の学科課程は大正年代なかごろまで続くが、「造林学実習」は第1学年の第3期、第2学年の第1、第2期、第3学年の第2期に、いずれも毎週5時間実施とある。時代とともに時間数が減ったものの、このころまでの乙科→実科生徒は、長時間の実習を通じて林木苗圃、林木見本園、見本林の維持や、造林用苗木の生産に、かなりの寄与をしていたと言えよう。

1919/大正8年に本科とともに学科課程の改正があり、「造林学実習」は第2学年の秋、春(の

ち夏、冬) 学期に毎週 1 回の実施となる。従来に比べて、さらに時間数が減った、この学年・学期・時間配置は実科の廃止まで続いた。

駒場時代の本科および乙科→実科の実習内容を、詳細に明らかにする資料は見当たらない。林木苗圃、林木見本園、見本林が講義室に近接しており、カリキュラム以外の随時の利用も、自習や気分転換を含めて多かったと思われる。

篤志林業夫のちの林業実地見習ほか:「篤志林業夫」は演習林で林業実地の習得を希望する者を対象に、1900/明治 33 年に設けられた制度で、修業年限は 3 ヶ年であった。その後、時代とともに実業学校卒業生など学力ある希望者が増えたので、1913/大正 2 年、名称を「林業実地見習」と改め、修業年限を 2 ヶ年に短縮した。

この制度による修業内容、修業者数などについての資料は乏しいが¹⁸⁾、駒場の林木苗圃には実地見習生用詰所があった¹⁰⁾。明治・大正年代の修業者は、駒場の演習林本部および林学科で 1 年程度を過ごしたのち、千葉演習林に移ったようである。なお、こうした制度によらない短期間の研修者も、千葉演習林での例から見て、駒場にもかなり居たと思われる。これらの人々は駒場で育苗などの技術を習得するとともに、諸施設の維持に必要な労力を提供したと考えられる。

明治・大正時代には、林業技術普及の講習会や見学会が、しばしば農科大学→農学部で開催された。たとえば、1906/明治 39 年および 1920/大正 9 年に東京で開かれた大日本山林大会のさいには、多数の山林会員が林学科本館列品室、林産製造実験室とともに、林木苗圃、林木見本園などを見学している^{48, 49)}。また、前記の新潟県森林組合連合会の例に見られるように、地方の林業関係者による見学も多かったと思われる。

3. 研究面での利用

林木苗圃: 初期には清澄山林への植樹用苗木の養成が行われた。この時代には、養苗にも植樹にも学問的には未知の部分が多く、その解明が研究であった。

清澄山林が大学に移管された翌春の 1895/明治 28 年 4 月に、本多静六は実習をかねての第一回植樹造林を行うが、結果は失敗に近かった。すなわち初年度 30 町歩の植樹を計画、駒場で養成したスギを主とする苗木 15 万本を清澄へ送るが、荷造り、輸送に手間取り、多くが傷んでしまう⁶⁾。残ったスギ 37 千本を植え付けるが¹⁾、なお枯死する苗が多かった。活着したのはわずかに 4 千本余で、一部が現存の南沢スギ林 (45C₁₀) に含まれている⁶⁾。この年に成功した植樹面積は、スギのほかにはアカマツを含め、2.4 町歩に過ぎなかった。

翌年は、清澄近在の民間業者からの苗木購入に切り替える。ところが、洪水川止めによる輸送遅延と冠婚葬祭による人夫不足のため、またもや苗木を衰弱させ⁶⁾、植樹面積は 2.7 町歩にとどまる。

しかし、これらの失敗から、山元への仮植によって苗木の健全性を確保し、植樹する方法を選ぶことになる^{2, 6)}。すなわち、駒場で養成したスギ満 2 年生苗、ヒノキ満 3 年生苗を清澄へ送り、

1年間仮植したのちに植樹を行い、好成績をえた。植樹造林は、1897年20.5町歩、1898年16.1町歩、1899年14.1町歩、1900年14.6町歩と、順調に進行する。造林樹種はスギ、ヒノキのほか、アカマツ、クロマツ、カラマツ、クスギ、クスノキなどで、いずれも駒場で育苗されたと思われる。

奥山官林の編入、演習林官制の確立によって、1898/明治31年から演習林所属職員が清澄に常駐するようになる。1900年に郷台苗圃が開設され、やがて植樹造林用苗木を生産するようになる。本多により始まった研究をかねての造林は、ほどなく千葉演習林の施業の手に移り、ときには年間30町歩をこえる植樹が実行された。

なお駒場からの苗木供給は、数量は減ったが、明治年代末ごろまで続いたようである。たとえば、1903/明治37年3月には駒場から、ヒノキ苗8,200本（菰包み33個）を送ったほか、スギ苗の第一回分として4,000本を用意した。また同年4月には、ヒノキ苗16,950本を送ったとの記録がある（千葉演習林来信書綴明治三十六年度、三十七年度）。また、1910/明治43年春の造林学現地実習のさいには、樹種など不明であるが、菰包み63個の苗木を駒場から送ったとの文書が残されている（千葉演習林往復文書綴明治四十二年度）。

林木苗圃では多くの内・外国産樹種の養苗を行い、一部は構内に林木見本園、見本林として植栽された。成育状況を調べ、見込みのある樹種苗木を清澄に送り、1897/明治30年から内国樹種見本林、外国樹種見本林の造成が始まる^{6, 37)}。

林木苗圃では付表-2のように、本多静六をはじめ、講座所属助手の近野英吉（1904/明治37年実科卒）、宮下（三宅）保雄（1911/明治44年実科卒）らによって種々の研究が行われた。

また1912/明治45年、千葉演習林七曲および今澄に設定した母樹試験地の材料苗木の養成も行われた。すなわち1907年秋、近野英吉はそれぞれ年齢の異なるスギ、ヒノキ、アカマツ母樹の種子を各産地から集め、翌年播種、満3年生苗まで育てて駒場から清澄へ送った^{6, 25, 38)}。

以上の試験研究や苗圃管理の実践を、参考の一部にしてまとめられたのが、本多造林学本論2「種子及苗圃」である⁴⁾。また戦前の森林家必携の「苗木仕立費明細表」は農科大学実験1910/明治43年調査となっており⁸⁾、当時の駒場苗圃の役割を端的にしめした例であろう。

林木見本園：時代とともに樹種数に消長が見られるが、全部の樹種名の記録は見当たらない。1905/明治38年ごろ植栽されていた外国樹種60種については、本多静六によるとと思われる説明がある⁴⁷⁾。各樹種につき、わが国での造林の可能性に触れている。

見本林（構内および代々木演習林）：初めは駒場構内に、のちに近くの代々木演習林に設定されたが、どのように研究に利用されたのかを明らかにする十分な資料は見当たらない。

林木見本園、見本林、植物園、ほかの駒場構内に成育する樹木、とくに外国樹種の一部については、その状況が本多造林学「樹種各論」⁵⁾や、上原敬二の「樹木大図説」⁴¹⁾に記載されている。また、スギ見本林で枝打ち試験が行なわれたとの記述がある³⁾。

代々木演習林は見本林として整備されたが、『東大一覧』以外の記述は少ない。次節に引用する望月の「駒場を憶ふ」¹¹⁾は、大正年代末の駒場の情景を記述しているが、近くの代々木演習林には、まったく触れられていない。わずかに山林誌にある「尚ほ本學の裏門を出でて左に曲り廣き街道を西方に直進すること約六七丁にして左方に入ること十數歩なれば本學の見本林に入るべし此處には内外數十種の重要林木を各一反歩つつ栽植せり林齡尚稚く林相を爲すに至らずと雖も稍森林としての成育状態を視察し得べし（原文のまま、太字表示は筆者ら）」⁴⁷⁾によって、駒場構内との位置関係や、初期の状況がわかる。

代々木演習林の所在地は「代々幡村大字代々木字大山」（大正十一年度以降演習林國有財産増減調査）で、大学構内図の範囲外に位置する。二万分一地形図「世田谷」（陸地測量部明治42年測図、大正6年発行）や、郵便地図「豊多摩郡代々幡村」（五千分一縮尺、東京通信管理局明治44年7月発行）などに、その所在は記入されていない。番地が不明なため、郵便地図上に位置を確定できないが、「字名」と上記の「裏門から六七丁」との距離から、代々木演習林は農学部駒場構内の北西端からほぼ西方に数百メートル離れた飛地として、存在したと考えられる。III 3 に引用する酒井美意子の記述には「東京帝大農学部の敷地の一部及び地続きの代々木演習林の敷地（太字表示は筆者ら）」²¹⁾とあるが、ここでの「地続き」は駒場の農学部敷地に、きわめて近いとの表現であろう。なお現在の渋谷区大山町は、戦後の区画改正で小田急線の西側に所在する。しかし字大山、のち代々木大山町の時代には、小田急線の東側、現上原三丁目の一部が含まれており、その南東部分は農学部の北西端に近接していた。

代々木演習林は、設置から廃止まで25年の経過があったが、見本林の樹種、成育状況、教育・研究への利用などについての資料は、ほとんど見当たらない。次節の望月の文章に触れられていないのは、近いとはいえ飛地で、一般の教職員や学生生徒が日常的に立ち寄る場所ではなかったゆえと思われる。

4. 文献に見る野外施設の情景など

野外施設の情景：本郷への移転が決まった大正年代末の駒場農学部の状況を、演習林所属助教授の望月 峯（1921/大正10年本科卒、のち東京高等農林学校教授）は「駒場を憶ふ」の表題で記述している¹¹⁾。この文章から野外施設に関係した部分を原文のまま以下に引用する（太字表示は筆者らによる）。なお図-3を参照すると内容を理解しやすい。

「農学部の敷地十八萬餘坪の廣大な地積の上で、移轉事業を最初に着手したのはその西北隅にあった苗圃、植物園、樹木園及農場の部分である。今日各科教室の中央を貫いてゐる大道は、一直線に農場事務所に突當り左右に分れて裏門に通じ或は農場内に分散した。此事務所は、其地盤が既に附近で最も高い上に、二階建で中央にピラミッド形の時計塔を冠していたから周囲の平屋建、森等を遙かに凌いで鋭く蒼空に聳えていた。幾棟かの細長い農舎、畜舎、花園廣庭、樹木園が先づこの事務所の附近に集合し、それに續いて厩舎、牧場、桑園、果樹園等が取圍み、更に其

外方には境界の杉、松、雑木等の並木迄、廣大な圃場、苗圃等が擴がつてゐた。而もこの境界附近に或は境界を透して今日見るやうな文化住宅は勿論、一軒の農家さへなく、都會とは全く縁のない武藏野の一隅を思はしめ、農村に見るやうな平和な落付いた氣分を十分に味ふことが出来た。かやうな氣持を起させる環境は學校の實習農場として、即農業を學習の對象とし、將來を農業に捧げんとする學生が、生れて初めて得る尊い體驗の場所として、最も必要な條件であらうと思ふ。それ故にこそ春から夏へ、夏から秋へかけて、圃場に桑園に時には水田に或は果樹園に、暑氣も疲労も、空腹も厭はず汗に濡れて度々の實習にいそむことができたのではあるまいか。

農場實習のない他科の學生にも四、五月頃溢れるやうな陽光を浴びて麥畑や果樹園に隠見する思ひ思ひの扮裝の學生群が無性に羨しく感じられた時も屢々あつた。それは無味乾燥な講義の整理場として、潤ひのある教室として、亦時には疲れた頭腦の安息所として不足のない設備と思はれたから。この農場から受けた一つの忘れ得ない思ひ出は授業時間の合間、或は放課後に、此處をぶらつく散歩の味である。東京と云ふ大都市に近接しながら此處では凡そ都會の持つすべての不愉快な騒音、混濁の空氣から解放され、鄙びた田園に遊ぶやうに家畜や家禽の閑かな鳴聲を清澄な空氣の中に聞くことが出来た。芝生を背に紺碧の大空を仰いで、或は眞黒な圃道の上に立つて武相國境に沈む夕陽を浴びながら、思索に耽る時は、少くとも都の一隅に居ることを全く忘れてゐた。

今日の前田邸の門前の道路より稍東寄りに、南北に向ふ一直線の通路があつて、其府道に開く處に立派な花崗岩の門と守衛詰所とが置かれ、南の突當は、恰度農場事務所の北側面になつてゐた。此門は其昔正門であつたと云はれるだけにそれに通ずる通路は、ひばの古い美しい並木に挟まれてゐた。並木の背後には**植物學教室及林學教室所屬の樹木園**、**見本林**が造られていたが、何れも相當の年數を経たものの如く、大木のみの一團の美林を形造つてゐた。吾々は平日でも、僅々數十分の時間の豫猶さへあれば、ここに足を運んで、各種林木の完成せる形態、春夏秋冬の詳細な變化迄、殆ど勞せずして充分に觀察出來たし、文字による不安定、不十分な記憶を強ひられる必要がなかつた。薄暗いこの森の中の逍遙から生垣一つ潜つて廣濶な農場へ出た時の氣分轉換も、容易に味へぬものの一つであつた。

この裏門に近く、西に延びて一團の建物群とそれに續いて稍廣い苗圃があつた。北境の府道とは带状の林叢と三田用水とで絶縁され、亦農場とも生垣で距てられて、小別天地をなしてゐた。**林學教室所屬の苗圃**である。林學科の學生に對して農場が農學科學生に於けると同様の意義を持つてゐた。此苗圃で育てられた數知れぬ樹木の苗木は、今日各地の演習林で報恩の實を結びつつある。尚又今日外國樹種として我國内に繁殖しつつある多數の樹種が始めて其根を我國土に下したのも、恐らくこの苗圃であらう。」

以上の記述によって、駒場における野外施設の状況と、それらが学園生活に果たしていた役割を、ほぼ把握できる。

施設の名称と混乱：造林学関係野外施設の名称は、『東大一覧』では林木苗圃、林木見本園、見本林と表記されている。これを標準にすると、実際には略称、別称、ときには総称？を使用した記述が多く、現在では、なにを対象にしているのか判断しにくい例もある。

「林木苗圃」のばあい、日常的には「苗圃」と短縮されるのは、当然である。対象に誤解の余地は少なく、位置も構内図に明示されている。なお「駒場苗圃」の名称は、林木苗圃を指すだけでなく、場合によっては林木見本園、見本林などを含めている。本報の表題も、そうした内容で、のちの「田無苗圃」の用例と共通する。

「林木見本園」については、「樹木見本園」、「林学科附属植物園」、「樹木園」などの表記が見られる。隣接の植物学教室附属の「植物園」との区別が意識されたばあいもある。しかし「植物園」は、当初の分科植物園・有用植物園の区分から、のちに樹木植物園・草本植物園の区分に変わったようで、かなりまぎらわしい状況にあったと想像される。望月の記述にある「樹木園」は、「林木見本園」と植物園の「樹木植物園」を併せての表記であろうか。「植物園」の位置は構内図に明らかであるが、隣接して「林木見本園」があったと考えられる。1907/明治40年の山林誌に掲載された「農科大学植物園」の写真は⁴⁸⁾、あるいは「林木見本園」なのかも知れない。

「見本林」は、そのままの表記が使用されている。前記のように、大正年代なかばの『T8/9年東大一覧』から見本林の記載が消える。かなり早い時期に見本林は本来の役割を終えたが、その後も残されたようで、構内図で「植物園」の西側にある林が、それであろうか。

1920/大正9年10月28日に、裕仁皇太子（のちの昭和天皇）の農学部行啓があり、巡覧場所のひとつに林学見本園及び苗圃があげられている。その内容は「林学見本園内外國産林木生育の現状、立木根倒し器械の作業、楢木に椎茸発生の実況及び學生生徒實習用の苗圃事業室（本多博士説明）（原文のまま）」との記事がある⁵⁰⁾。「林木見本園」の立木を、根倒しするとは考えられないので、上記の「林学見本園」は「林木見本園」と旧「見本林」を併せた呼称であろうか。すなわち、「林木見本園」で内外國産樹種の生育状況をご説明、つぎに旧「見本林」内で機械による立木根倒し作業と楢木に椎茸発生状況をご覧にかけたのち、「林木苗圃」へご案内したと考えられる。

1935/昭和10年、農学部の本郷移転をまえにした「駒場を語る座談會」で、島田錦蔵助教授（1926/大正15年本科卒、のち林学第三〔林政学〕講座担任教授）は「各教室がズット並んで居るその間に現在の公孫樹の並木がある。あの並木の突當りに農場の事務所がありました。その事務所の右手に**林学の見本園**があった。また見本園などに多種多様な且つ大きな木がありますが、ああ云ふ見本園を造るに付ても随分苦心談があったらうと思ひます。さう云ふ苦心談も伺ひたいと思つて居りました。」と発言している⁵¹⁾。ここでの「林学の見本園」も旧「見本林」を含めていたと思われる。

III. 駒場から田無への移転

1. 本郷移転計画、震災復興計画、駒場苗圃の廃止^{27, 30, 35)}

一高（旧制第一高等学校）との敷地交換による本郷移転構想は、農科大学が設置された翌年の1891/明治24年に、早くもあったといわれる。時代とともに総合大学の長所を生かすには本郷キャンパスに移るべきだとの意見が強くなる。大正年代に入って古在由直農科大学長が山川健次郎総長に移転問題につき提起し、種々検討が行われた。一高との交渉が具体化するのには、古在が総長に就任した後の、1921/大正10年のことで、移転については後任の農学部長川瀬善太郎の強い支持があった。しかし、1923/大正12年9月の関東大震災による本郷キャンパスの被害で、交渉はかなり進んだ段階で中断する。

単科大学に近い実態を解消し、総合大学の実をあげる趣旨に反対の農学部教官はいなかった。しかし、本郷移転にともなう問題は、身近に十分な圃場を確保できないことと、そうした市街地が農学の教育環境として適切といえるかにあった。このため本郷移転に対しては賛否が分かれたが、重農主義者に反対が多かったといわれる。

林学科では、長く演習林長をつとめた川瀬善太郎（林学第三〔林政学〕講座担任教授）が、早くからの移転推進派であった⁵¹⁾。しかし、本多静六が担当する林学第二〔造林学〕講座では、圃場問題が切実であったと思われる。

ところで、震災で壊滅したキャンパスの復興を、本郷で行うことには、本郷所在学部の教官の一部が疑問をもった。かなり以前から用地不足が問題になっていたからで、ここに本郷からの大学移転構想が浮上し始める。そこへ農学部から二つの候補地案が提案された。

ひとつは、長く農場長をつとめた原 熙（農学科園芸学講座担任教授）らによる、三鷹周辺地への郊外大学都市建設案である。もうひとつは、本多静六らによる代々木錬兵場への移転案で、近隣の駒場キャンパスの温存を視野に入れていたと思われる。両案とも、本郷移転にともなう農学部の難問を解決するものであった。

そこで上記二案に、本郷居残り案を加えた三案につき、全学教官の意見分布が投票で調べられた。結果は代々木、本郷、三鷹の順であった。しかし、代々木案は陸軍省から拒否され、三鷹案は経費面で難しく、結局、本郷を中心にした復興を考えることになる。

その基本方針は、震災当時の敷地のほかに、隣接の土地を購入または移管等の手続きにより本学の敷地に加えて用地不足を緩和し、農学部を移転させ、復興を図るとともに、総合の実をあげるというものであった。これにより、震災前は農学部だけの問題であった本郷移転計画が、全学の復興計画に組み入れられることになる。

1924/大正13年9月、一高との敷地交換の正式調印が行われ、駒場農学部18万坪のうちの7万坪弱が一高分となる。

1925/大正15年8月、駒場一高用地の西側4万坪は代々木演習林1万余坪とともに、本郷赤門の前田侯爵邸敷地と等価交換され、間もなく駒場で新前田邸の造成が始まる。大学が取得した赤門地区には、のちに理学部2号館が建設され、小石川植物園にあった植物学教室、および弥生門近くにあった自然史系五教室（動物、人類、地質、鉱物、地理）が移った²⁹⁾。

さらに駒場前田邸用地の西側には、震災で壊滅した航空研究所が越中島から移転し、1927/昭和2年には一部の庁舎が竣工した³¹⁾。

2. 田無への移転と演習林関与の中断

上記のように昭和年代に入ると駒場では、林木苗圃などの廃止、農場の縮小が始まり、移転候補地が検討される。1929/昭和4年10月31日、北多摩郡田無町の現在地を「農場及び苗圃見本林」として購入登記、移転先が確定する¹⁰⁾ (図-4)。

この時期、苗圃などに最も関係の深い林学第二[造林学]講座は、教授、助教授とも欠員であった。担任教授の本多静六は1927/昭和2年3月に定年退官し、所属助教授であった中村賢太郎は1925/大正14年5月に依願退職して、ドイツに私費留学した。中村は1928/昭和3年3月に帰国するが、講座へは復帰できず、同年5月から演習林業務嘱託として、樺太演習林の天然林研究に着手する。

本多が退官後の造林学講座は、林業試験場長の白澤保美(1894/明治27年林学本科卒、右田半一郎と同期)が、兼任の農学部講師として担任した。この時代、駒場最寄の造林学関係野外施設は、府中演習林をのぞき廃止されていた。そうした状況下、学生・生徒の「造林学実習」が、どのように行なわれていたかを明らかにする資料は見当たらない。この時期に、演習林業務嘱託で造林学専攻の大学院学生であった佐藤敬二(1927/昭和2年林学本科卒)は、残存した農学部駒

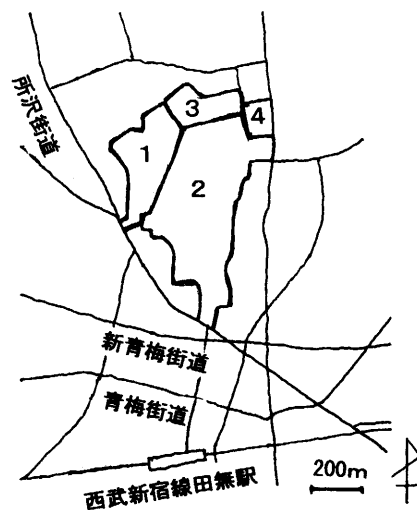


図-4 田無試験地周辺図

1 田無試験地, 2 東京大学多摩農場, 3 東京大学原子核研究所跡地, 4 谷戸小学校

場構内、林業試験場（目黒）、千葉演習林などを利用して研究を行なっている^{23, 24}）。

白澤は講座担任とはいえ、その役割は教育が主であったと思われる。したがって、野外施設の移転候補地の選定、購入、苗圃・樹木園など林学関係区域（以後「田無苗圃」の名称で記載する）の確保、管理体制の決定などには、当時の林学科主任兼演習林長の右田半四郎（林学第一〔森林経理学〕講座担任教授）が、主に関わったと考えられる。

田無苗圃には、購入地のうち、農場には不適當な雑木林の多い区域が割り当てられた¹⁰。武蔵野台地に例が多いが、ここでも大雨のさいに水が溜まりやすいところが、林地として残されていた¹⁵。面積が9.3町歩になった根拠は明らかでない。駒場時代の林木苗圃1.3町歩、林木見本園1.4町歩に見本林の代々木演習林4町歩を加えると6.7町歩である。駒場構内にあった旧見本林をプラスしたのであろうか。なお農場面積は27.7町歩で、駒場の29.5町歩²²より少ないが、その後29.4町歩に増えている³⁶）。

駒場時代の造林学関係野外施設の維持管理は、林学科と演習林が共同で行ってきた。しかし、田無移転を機にすべての管理が林学科、実質的には造林学講座に任されることになる。資料は見当たらないが、演習林が関与しなくなった理由としては、以下が想像される。

- (1) 駒場構内の施設と密接な関係にあった代々木および府中演習林の廃止または廃止予定で、演習林管理の土地が無くなった。
- (2) 演習林本部が移転する本郷から田無までは距離がある。
- (3) 地方演習林の整備が進むにしたがい林学科との関係が変化した。たとえば、かつての林木苗圃と清澄山林のような関係は考えられなくなったこと、林業実地見習の修業が地方演習林だけで可能になったこと、などがあげられる。
- (4) 国有財産調査会（大蔵省主導）で大学演習林の規模が問題視されるなか¹⁹、多少でも事業の整理縮小は好ましいとされた。

3. 駒場の移転跡地の利用と現況

さきにあげた図-3の「農学部構内図」には³⁰、本郷前田侯爵邸敷地と交換した4万坪が「本学敷地外」として区画表示されている。これに代々木演習林を加えた土地の利用について前田利為侯爵の長女、酒井美意子は以下のように記述している²¹）。

「大正十五年八月に、本郷の屋敷一万二六〇六坪を、東京帝大農学部の敷地の一部四万坪及び地続きの代々木演習林の敷地一万一五四三坪と等価で交換した。

そのうちの一万三〇〇〇坪を堀で囲って、地上三階、地下一階建ての洋館と芝生やテニスコートの洋式庭園、書院造りの二階建ての日本館と茶室や煎茶亭（のちに戦時中、金沢兼六園内の成巽閣に移す）の散在する日本庭園、そして馬場と園芸場が作られた。あとの地所は、堀の周囲に主だった家職員の住居を建てて住ませ、更に残りは親族や縁故関係の人々に分譲したのだった。（原文のまま、太字表示は著者らによる）」

塀で囲われた前田邸敷地は、本郷赤門時代とはほぼ同じ面積で、農学部の農場事務所、植物園、林木見本園などの跡地である。敗戦後、占領軍の接收などがあったが、現在は「目黒区立駒場公園」になっている。農学部裏門に近い林木苗圃と造林実習室などの区画および代々木演習林は一般の住宅地となった。また、裏門より西側部分にあった苗圃地は東京大学先端技術センター（旧航空研究所のち宇宙航空研究所）の一部になっている。

これらの地域には、大木や珍しい樹木があったと思われるが、駒場苗圃の廃止にあたって、どう扱われたのかを明らかにする資料は見当たらない。農学部が本郷へ移転する1935/昭和10年および前年には、本郷の農学部構内および田無の林学苗圃に多数の樹木が移植されたが、それらは駒場の東西を走る正門大通り沿いに所在するものであった¹⁶⁾。なお、現在の駒場公園内には大木が多いが、造成から70年以上が経過しており、農学部時代からの樹木が残されているのかどうかは見分けにくい。

4. 府中演習林の廃止

すでに述べたように府中演習林は、駒場構内の野外施設の延長として設置された。大部分が未立木地であったが、保育関係の教育・研究用として、スギなど内外国産重要樹種の小面積造林が行われた（『T02/03年東大一覧』）。しかし、それらを利用した成果と特定できる資料は少ない。わずかに本多造林学樹種各論に、スギ林を利用した枝打試験の記載が見られる程度である⁵⁾。

付表-3に府中演習林における研究業績をあげたが、ほとんどが薪炭林（矮林）および製炭関係である。1922/大正11年開催の大日本山林会第4回林業講習会では、木炭の品質鑑別会場にもなった。

府中演習林は平坦であったが、地下の土壤層が波状に変化し、立木の成長に局所的な大差を生じた¹⁵⁾。このため、当初の目的であった育林関係の研究は、十分な成果をえられなかったようである。

1935/昭和10年、農学部実科は独立して東京高等農林学校となり、駒場から府中へ移転する。その敷地として府中演習林は廃止された。

IV. 田無苗圃（別称 多摩苗圃）の整備

1930/昭和5年3月、演習林長と林学科主任を兼務していた右田半四郎教授が、定年退官した。同時期、林業試験場長白澤保美も定年をむかえ、兼務の林学第二〔造林学〕講座担任講師を辞任する。

同年6月15日、中村賢太郎が演習林業務囑託から林学科助教授へ復帰、造林学講座担任（1933年11月教授に昇任）となる。以後、田無苗圃の整備は、中村の責任のもとで進められることになる。中村は後年、生涯の業績として樺太演習林での天然林調査、千葉演習林でのスギ母樹試験とアカマツ粗密試験、および田無での苗畑と見本林の造成をあげている¹³⁾。

前述のように、前年の1929/昭和4年10月31日に田無苗圃は発足するが、同日付、演習林雇杉田英時は北多摩郡へ出張を命じられている。一ヶ月後の11月30日付で杉田は現地責任者として発令された。また同日付で、吉野勇吉（1902/明治35年7月17日付林学科駒場苗圃勤務定夫に採用）と金子 関（大正14年5月22日付代々木演習林勤務定夫に採用、大正15年8月2日代々木演習林の廃止にともない同日付府中演習林勤務）が、林学科田無苗圃勤務の定夫に発令された。

現地責任者の杉田英時は、埼玉県北埼玉郡東村（現在大利根町の一部）出身の高小卒、1909/明治42年に千葉演習林勤務、1914/大正3年から林学科駒場苗圃勤務、1915年演習林雇、1916年演習林本部勤務となり府中演習林の管理に関わった。1918年から1921年まで台湾演習林に在勤ののち、演習林本部に戻ったと思われる。なお、杉田の演習林から農学部への所属換は遅れ、昭和5年8月31日付の発令とある（自明治三十二年度至昭和十年度 演習林雇員備人履歴書綴）。

現在、田無試験地に保管されている一番古い地図は、1929/昭和4年3月、縮尺1/1200の境

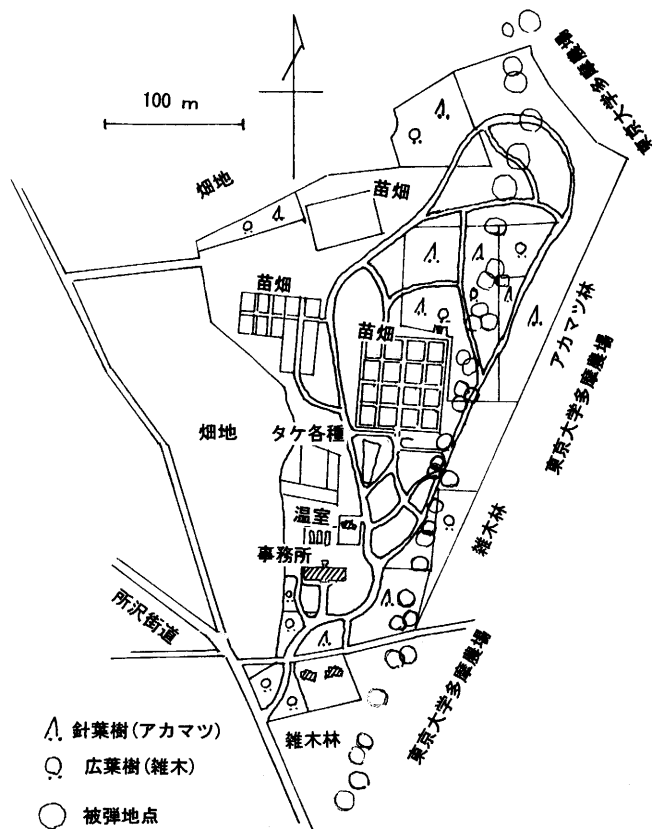


図-5 田無苗圃構内図と空襲被害 1945/昭和20年（田無試験地資料から作図）
被弾は、昭和20年4月2日未明の空襲による

界測量図「東京府北多摩郡田無町所在 田無農場苗圃見本林実測図」である。この図を基本にして、杉田は発足時の植生の状況をしめす「多摩苗圃実測図」を作成した。

「多摩苗圃実測図」には、周回道路などが鉛筆書きフリーハンドで描きこまれている。後年の中村の説明によると、田無苗圃の路線や、庁舎（事務所）周辺部の建物・庭園などの配置設計は、小寺駿吉（1922/大正11年林学実科卒，1927/昭和2年九大林学科卒，のち千葉大教授，東大で造園学非常勤講師）が行い、当時における典型的な造園手法を採り入れたという。

整備は中央部の畑地跡を中心にした第一苗圃（第一苗畑）と周回道路の造成から始められた。その後に作成された「見本樹園幹線道路及開墾地予定図」，「田無苗圃実測図」（いずれも日付なし）から、道路，苗圃，建物などの造成の進行状況が把握される（図-5）。

この時代，中村は造林学講座所属助手の中村得太郎（1924/大正13年林学実科卒）をとともない，しばしばタクシーで田無苗圃を訪れ，造成の状況を視察し，種々指示した。苗圃の職員は，同じ中村姓ゆえに背丈で，大きい中村先生（賢太郎），小さい中村先生（得太郎）と区別し，大きい先生が来る時は，ずいぶん緊張したとのことである。作業は，杉田以下の職員が指揮し，人手は周辺の農家から豊富にえられたという。

樹木園の造成には種々の苦心があった。道路に曲線が多いのは，駒場での見聞から中村（以下ことわらない限り賢太郎）が小寺駿吉に依頼したもので，道沿いの見本樹が枯れて空隙を生じても，見苦しくないための工夫である。また，見本樹苗を将来の樹冠の拡張を考え，チガヤのなかに散生的に植えたところ成長がわるく，いっぽう残り苗を苗畑の片隅に密生させて植えておいたところ，かえって成長が良く，大部分を植え替えたという^{12, 14)}。中村作成の樹木園用の樹種リストメモが残されているほか，中村が当時使用の「森林家必携」⁸⁾の樹木攬要には，田無苗圃所在の樹木名に赤丸が付けられている。

1934/昭和9年5月22日～25日には，中村得太郎の指揮で駒場から20～40年生，63種78本の樹木が輸送され，植栽された（翌年クスノキの大木1本を追加移植）¹⁶⁾。いずれも駒場構内の東西を走る正門大通り沿いの樹木で，旧造林学関係野外施設由来のものは無いと思われる。

同1934年9月，杉田によって「田無林学苗圃見本林実測図」が作成された。樹種の配置など現状に近い。また，この年，庁舎の工事も終わり，田無苗圃の造成工事は一段落したといえよう。

駒場林木苗圃内の建物あるいは林学科列品室に，参考用として所在した外国製造林作業用器具などの標本類は，このころまでに田無へ移されたと思われる。なお，昭和30年代後半に田無試験地の研究組織が拡充され，研究室スペースが不足になった。その対策として，外国製造林用器具などの大半を，千葉演習林へ移した。同演習林標本館に所蔵の出所来歴不明とされる造林用器具の一部は，駒場→田無由来と考えられる³⁴⁾。

田無苗圃の利用は，1931/昭和6年ごろから始まったと思われる。すなわち，佐藤敬二によるマツの研究は，1931年春，田無苗圃に播種した苗を材料にしている²⁶⁾。

中村による千葉演習林での造林学現地実習は、1930年秋の実科2年生に始まるが、本来は春に実施されるはずの実習であった。翌1931年からは従来どおり、3月に本科1年生、4月に実科2年生の現地実習が行われた¹⁷⁾。田無苗圃における造林学野外実習も、第一苗圃の整備が進んだ、この年から開始されたと考えられる。

その後、田無苗圃における実習は、樹木園などの整備の進行とともに充実していったと思われる。昭和一桁年代、農学部がまだ駒場にあった時代の学生生徒に渡したとみられる「田無林學苗圃交通案内」によると、田無での実習開始は午後2時半ごろのようである。交通手段として電車のほかに、円タク利用があげられているのが興味深い。駒場の通用門から新宿まで歩き、タクシーに乗ったのであろうか。値段の交渉と相乗り人数しだいでは、帝都電鉄井の頭線(1933年1月開通、現在の京王井の頭線)、省線(現JR)山手線、西武鉄道(現西武新宿線)と乗り継ぐ電車利用よりも、便利で安かったのかも知れない。

V. 演習林への管理移管まで

昭和10年代に入ると小型ガラス室・温室の設置と熱帯・亜熱帯産樹木の養苗^{39,40)}など、試験研究面での多少の進展はあったが、日中戦争から太平洋戦争への拡大による労力不足がしだいに深刻になる。1941/昭和16年7月には水害、1945年4月には空襲による被爆被害を生じた(図-5)。こうしたなか1943/昭和18年2月に、現地責任者の交替があった。

敗戦後は、食糧難に対応するため圃場の一部で一時期、農作物が栽培された。経費不足による人手難のため、整備は現状維持がやっとで、被爆跡地などは荒廃したままに放置された。

造林学実習は続けられたが、交通事情が悪いため日曜日を利用するばあいもあった。また、1948/昭和23年春には、林業学専修学生の「林産学実験(南 享二助教授担当)」として、岩出亥之助氏の指導で、のこくず培養のシイタケ種菌をコナラ原木に接種した。この時代に、造林学以外の実習に利用された、めずらしい例であろう。

研究面での利用は、きわめて低調で、苗を含めての材料採取、育成材料の植栽などが主であった。戦後の窮乏状態から抜け出すとともに、圃場を利用した試験研究が種々計画されたが、実現には困難が多かった。経費および人手不足のほかに、維持管理優先の現地責任者の意向が障害になっていたようである。

そうした状況のなかで昭和20年代末近くなると、田無苗圃の存続にかかわりかねない問題が、つぎつぎにおこった。すなわち、1953/昭和28年の農場用地内北東隅への田無町谷戸小学校建設、1954年の農場・苗圃北側隣接地への関係市町によるゴミ焼却場建設計画、1955年の農場用地内北側への原子核研究所設置である(図-4)。これらの問題には、必要に応じて管理責任者である造林学講座担任教授が、農場長とともに対応したが、情報の遅れなどあって農場に追従することが多かった。さいわいにも結果として、田無苗圃への実害は少なかった。

しかし、こうした過程のなかで造林学講座の教室員は、田無苗圃の将来に強い危機感をもつようになる。存続には、早急な整備と現地責任者の交替による研究利用の活性化、および、学内外に対する交渉能力の強化が必要と考えられた。その最良の方策として1954年ごろから教室員のあいだで考えられたのが、田無苗圃の管理運営を演習林へ委託することであった。造林学講座担任教授の中村は、当時、演習林長を兼ねていたが、教室員のこうした要望に対して、当初は慎重であった。田無苗圃への愛着から講座管理の形での永続を望む気持ちもあったろうが、なによりも講座間の競合による教育研究利用への悪影響を心配したようである。しかし1956/昭和31年3月末の定年退官を間近にして、最終的には演習林へ移管の方針を決断、実現させる。

中村は、退官して4年後の1960年5月4日、突然、田無を視察に訪れた。場内を一巡ののち、IRGAによるスギ、アカマツ苗の光合成測定などを見分、演習林の管理に移った田無苗圃が、試験研究に活用されている状況に満足の様子であった。再訪を約されたが、それはついに果たされなかった。

VI. お わ り に

演習林の管理運営に移って、田無苗圃の整備充実は急速に進み、やがて田無試験地と改称する。造林学を主としていた教育・研究利用は、林学における生物関係諸分野の利用へ拡大し、めざましい成果をあげている^{10, 33)}。

演習林の創設前後、駒場苗圃と清澄山林は密接な関係にあった。地方演習林の整備が進むにしたがい両者の関係は薄れ、駒場移転を機に、演習林と林学苗圃間の管理面での関わりは消滅する。

本郷に移った演習林本部は、しばらくは手近に研究施設をもたなかったが、1942/昭和17年5月に石炭ボイラー暖房の温室を完成させる。ここでは、千葉演習林や田無苗圃で、1940年ごろから育苗した熱帯・亜熱帯産の樹木³⁹⁾、その他を受け入れ育成した。翌1943年の「樹芸研究所」創設、「南方演習林」構想、1944年の「南方自然科学研究所」創設など、大戦中の南進政策下のことである。この時期、演習林が温室以外の研究施設を、本郷に拡充する構想があったかどうかは不明である。

しかし、温室の利用^{40, 42)}が進まないうちに敗戦となり、状況は一変する。1947/48年に、樹芸研究所の温泉熱利用温室の完成もあって、本郷構内の温室は放置に近い状態となり、昭和30年代に入って取り壊される。現在の農学生命科学図書館の東側に位置した温室跡地は、他学科が利用することになる³²⁾。

演習林が林学科田無苗圃の管理運営を引き受けたのは、そうした時期であった。1962/昭和37年、田無苗圃は田無試験地と改称、英文名称はExperiment(al) Station at Tanashiと定められた。そのころの状況からすれば、試験地そのままにExperiment Fieldにするのが適当との批判があり、Fieldとした印刷物も少なくなかった。当時のスタッフがStationとしたのには、演習林

内での位置づけを含め将来への抱負があつてのことと思われる。その後の田無試験地が、Stationの名にふさわしい内容と機能を、どの程度備えたかについては、さまざまな見方がある。

資料の探索や閲覧に、ご配慮を頂いた田無試験地と千葉演習林の方々に、お礼申し上げます。

引用文献

- 1) 服部正一(1895): 農科大学造林演習記事, 山林 **149**: 50-57.
- 2) 本多静六(1896): 新植せる苗木の枯死を防ぐ方法(質疑応答), 山林 **161**: 43-49.
- 3) 本多静六(1910): 造林學, 本論 5, 森林手入法(疎伐, 枝打)及び森林作業法, 901-1086, (p. 961), 三浦書店, 東京.
- 4) 本多静六(1911): 造林學, 本論 2, 種子及苗圃, 143-532, 三浦書店, 東京.
- 5) 本多静六(1925): 造林學, 各論 1, 針葉林木編(13版), 698 p. (p. 77), 三浦書店, 東京.
- 6) 本多静六(1926): 清澄演習林本多教授指導造林實習日誌, 148 p., 東京帝國大學農學部附屬演習林.
- 7) 本多静六(1931): 私の關係した事業二三, In: 明治林業逸史, 385-397, 884 p., 大日本山林會, 東京.
- 8) 本多静六ほか(1932): 森林家必携(36版), 三浦書店, 東京.
- 9) 泉 桂子・箕輪光博・大橋邦夫・鈴木 誠(2000): 千葉演習林沿革史資料(4)—千葉演習林第1次経営計画「千葉縣下演習林經營方案」(本文)—, 演習林(東大) **39**: 1-58.
- 10) 小久保 醇・八木喜徳郎(1994): 田無試験地, 演習林(東大) **32** (100周年記念号): 143-164.
- 11) 望月 峯(岑)(1935): 駒場を憶ふ, 駒場 **10** (駒場回顧號): 57-63, 駒場學友會(モチヅキ レイ, 岑シンとした印刷物も多い).
- 12) 中村賢太郎(1950): 造林學隨想, 357 p. (p. 93), 地球出版, 東京.
- 13) 中村賢太郎(1958): 造林三十五年, 241 p. (p. 20), 石崎書店, 東京.
- 14) 中村賢太郎(1971): 隨想造林學—喜寿翁の造林回顧, 295 p. (p. 45), 中村先生喜寿記念會, 日林協.
- 15) 中村賢太郎(1974): 造林事業の問題点, 林経協月報 **149**: 1-9.
- 16) 中村得太郎(1936): 季節外に於ける大木移植並にトラクター運搬, 造園研究 **17**: 32-59.
- 17) 根岸賢一郎・鈴木 誠・斯波義宏(1991): 千葉演習林沿革史資料(3)—東京大学農学部林学科学生の造林學現地実習の変遷—, 演習林(東大) **28**: 13-57.
- 18) 根岸賢一郎(1997): 千葉演習林沿革史資料(番外メモ)—往復文書綴に垣間見る千葉演習林の昔—, 演習林(東大) **36**: 1-342 (p. 123).
- 19) 奥山洋一郎(1999): 戦前期における東京大学演習林をめぐる縮小論議—国有財産整理事業における東大の対応—, 東大演報 **102**: 151-201.
- 20) 大橋邦夫(1994): 総説, 演習林(東大) **32** (100周年記念号): 1-7.
- 21) 酒井美意子(1982): ある華族の昭和史—上流社会の明暗を見た女の記録—, 主婦と生活社, (講談社文庫 1986) 273 p. (p. 68).
- 22) 佐々木 喬(1935): 農場の今昔, 駒場 **10** (駒場回顧號): 89-95, 駒場學友會.
- 23) 佐藤敬二(1930): スギの根の發達に関する解剖學的研究, 東大演報 **10**: 1-46+pl.
- 24) 佐藤敬二(1930): スギ挿木に関する理論的研究, 東大演報 **10**: 1-34+pl.
- 25) 佐藤敬二(1930): スギの染色體數に就て, 日林誌 **12**: 396-399.
- 26) 佐藤敬二(1933): マツに関する基礎造林學的研究, 第1報 毬果の大小が種子の品質並稚苗の生育に及ぼす影響, 東大演報 **16**: 1-28.
- 27) 東京大学百年史編集委員会(1985): 東京大学百年史, 通史 2, 1129 p. (p. 396, 685).
- 28) 東京大学百年史編集委員会(1986): 東京大学百年史, 資料 3, 961 p. (p. 414).
- 29) 東京大学百年史編集委員会(1987): 東京大学百年史, 部局史 2, 1188 p. (p. 493, 525).

- 30) 東京大学百年史編集委員会 (1987): 東京大学百年史, 部局史 2, 農学部抜刷, 399 p. (p. 86, 352, 392).
- 31) 東京大学百年史編集委員会 (1987): 東京大学百年史, 部局史 4, 1376 p.
- 32) 東京大学農学部附属演習林 (1962): 演習林の近況, 演習林 (東大) **14**: 171-257 (p. 182).
- 33) 東京大学農学部附属演習林 (1994): 東京大学演習林における試験研究 100 年, 224 p. (p. 171).
- 34) 東京大学農学部附属演習林千葉演習林 (1997): 千葉演習林第 11 期試験研究計画, 演習林 (東大) **37**: 1-82.
- 35) 東京帝國大學 (1932): 東京帝國大學五十年史, 下, 1333 p. (p. 656, 1218).
- 36) 東京帝國大學 (1942): 東京帝國大學學術大觀 (醫學部, 傳染病研究所, 農學部), 888 p. (p. 862).
- 37) 東京帝國大學農學部演習林 (1926): 東京帝國大學農學部千葉縣演習林見本林要覽, 18 p.
- 38) 東京帝國大學農學部附属演習林 (1933): 東京帝國大學農學部附属千葉縣演習林概要, 72 p. (p. 33).
- 39) 東京帝國大學農學部附属演習林 (1941): 最近輸移入せる樹木苗木及び種子目録並にその育苗成績, 演習林 (東大) **4**: 70-89.
- 40) 豊島恕清 (1942): グアユールゴム (Guayule Rubber) に就て, 南方資源研究資料 **1**: 31-38.
- 41) 上原敬二 (1961): 樹木大図説, I: 1300 p. II: 1202 p. III: 1276 p. 索引: 537 p., 有明書房, 東京.
- 42) 陣内 巖 (1947): 數種熱帯樹木の染色體數, 東大演報 **35**: 9-14.
- 43) Anon. (1894): 雜報, 基本圖及林業圖, 山林 **140**: 64.
- 44) Anon. (1895): 雜報, 農科大學林學科學生生徒の實地演習, 山林 **145**: 62.
- 45) Anon. (1906): 林學教室・造林實習場平面圖, 寫眞, 山林 **278**.
- 46) Anon. (1906): 林學教室階上, 山林 **281**.
- 47) Anon. (1906): 林木見本園説明, 山林 **281**: 1-19.
- 48) Anon. (1907): 農科大學觀覽, 山林 **290**: 72.
- 49) Anon. (1920): 農學部 (駒場) 見學, 山林 **452**: 48.
- 50) Anon. (1921): 皇太子殿下東大農學部行啓記, 山林 **459**: 55-58.
- 51) Anon. (1935): 駒場を語る座談會, 山林 **632**: 66-81.

Anon.: Anonymous 著者が明示されていないもの

付表-1 造林学関係野外施設の変遷（主に東大一覧による）

年/月/日	事項「原文」	（出典）
1886/M19/07/22	東京山林学校が西ヶ原から駒場に移転，駒場農学校と合併し，東京農林学校となる	
1890/M23/06/12	東京農林学校を帝国大学に合併し，帝国大学農科大学設置	
09/10	農科大学学科課程を制定，農学科一部，同二部， 林学科 ，獣医学科を設置，実地に 従事する者を養成するため各学科に乙科を設ける	
1890-1892	東大一覧に教育・研究施設の記載なし（M23/24，24/25，25/26 帝國大學一覽）駒 場構内面積 166，189 坪	
1893/M26/09	各分科大学の講座の種類及びその数を制定，林学第二〔造林学〕講座発足	
1893/M26	東大一覧に教育・研究施設の記載が始まる （M26/27 帝國大學一覽，M27/01/08 発行，M27/28，28/29 同文） 「林學科實習用トシテ本學内ニ凡ソ 六町歩餘ノ苗圃 及安房國長狹郡清澄村ニ 二 百七十二町歩餘ノ林地 アリ」	
1894/M27/11/29	千葉県長狹郡天津町の山林 336 町歩を，林学実習用として，政府から交付される （のちの千葉演習林）	
1896/M29	東大一覧の教育・研究施設の記載が詳細になる （M29/30 帝國大學一覽，M29/12/18 発行，M30/31 同文） 林木苗圃 「一町三反歩，内國樹種凡二百餘，歐米及濠洲等ノ樹種四十餘（我國ニ移 植シ林木トスヘキ見込アルモノ），漸次清澄山林ニ移植シ森林トナサント期スルモ ノ」 林木見本園 「一町四反歩，有用樹木ヲ栽植シ其形状性質ヲ觀察シ 並ニ森林植物學 ノ實習ノ用ニ供ス，内國樹種百餘，外國樹種四十餘」 見本林 「主要ナル林木ヲ以テ造リタル森林ニシテ 一樹種毎ニ 其面積凡一〜二反 歩，樹木ノ生長，枝伐，疎伐，其他造林，利用上ニ必要ナル試験ヲナスノ用ニ供 ス，樹種ハくろまつ，あかまつ，やまならし，すぎ，ひのき，さはら，こなら， ほほのき，くるみ，さはぐるみ，けやき，きはだ，はげ，あかがし，てうせんま つ，かつら，まめがき，のぶのき等，敷地狹隘ノタメ漸次清澄山林ヘー」 植物園 （植物学教室所属），1 町歩，分科植物園と有用植物園がある 林学科列品室 「林學科列品室ニハ林業用具ニ在テハ内外諸外國ニ用フルトコロノ各 種ノ伐木運材植樹等ノ器械七十餘點圖書寫眞等合セテ二百餘個アリ—以テ森林利 用學及造林學講習ノ用ニ供ス」 房州清澄山林 「房州清澄山林ハ本學ニ附屬シ其面積三百三十六町歩餘ニシテ房州海 岸天津町ヲ去ルコト北一里餘ヲ隔ツル有名ナル清澄寺ノ在ル所ニシテ海ヲ抜クコ ト約三百五十メートル遙カニ南洋ニ面セリ 森林ハ常緑闊葉樹帯ニシテ主要ナル 林木ハすぎ及もみナリ すぎハ何レモ人工造林ニ係レリ 年度階級等ノ排列未タ 全ク宜シキヲ得スト雖モ現今良好ナル純林六十七町歩餘アリ 其最モ老イタルモ ノハ百餘年生ニ及ヘリ もみ林ハ天然林ニシテ或ハ純林トナリ或ハ雜木林ノ上木 トナリ混合林ヲ形成ス 純林ヲナスモノハ僅ニ五町歩ニ過キサルモ林齡九十年ニ 達シもみ林トシテハ本邦ニ於ケルもみ林中ノ上位ニ在ルモノトス 又雜木林ヲ形 成セル主要ナル樹種ハあらがし，あかゞし，こならニシテ其他七十餘種ノ常緑及 落葉闊葉樹ヲ混合セリ 其面積凡六十六町歩ナリ 此他ハ何レモ針闊混合林或ハ 點生木地及未立木地ニシテ 林相甚タ正平ナラサルモノ多シ 現今全林ヲ通算シ テ針葉樹材積十四萬尺メ 闊葉樹材積凡三千五百棚アリ 此森林ハ明治二十七年 本學に屬セシ以來林業上ノ模範林トナシ主トシテ教官及學生ノ研究并ニ學生生徒 ノ實習ニ供シ傍ラ廣ク世人ヲシテ合理ノ林業ヲ實際ニ知見セシムルノ目的ヲ以テ 道路ヲ開キ三角及多角測量ニヨリテ全林地域ヲ確定シ林相ヲ區分シ 之レニ次キ 經理上必要ナル十五林班及數多ノ小林班ヲ設ケ伐採列區ヲ整ヘ施業案ニ基キ毎年 ノ収穫及造林ノ方法ヲ規定ス 又從來 未タ斧斤ニ入ラサリシ一區ノ地 凡四町 歩餘ヲ以テ禁伐林トナシ永ク天然林ノ本色ヲ維持シ造林學上ノ參考ニ資ス」	
1897/M30/12/25	千葉県君津郡の山林 1,833 町歩（奥山林ほか）を，林学実習用として，政府から 交付される	
1898/M31/05	乙科を廃止し実科を設置	
07/20	東京帝国大学官制に 演習林 の条項を追加	
08/25	清澄に演習林派出所設置	

付表-1 続き

年/月/日	事項「原文」	(出典)
1899/M32	<p>農芸化学科から出火，東京農林学校時代からの建物焼失，これを契機に，建物は構内の東側部分に，圃場類は西側部分に集める整備が始まり，正門が北側から東側へ移される</p> <p>東大一覧の「房州清澄山林」の表題が「千葉縣下演習林」になる</p> <p>駒場構内面積 169,784 坪 (M31/32 東京帝國大學一覽)</p>	
1900/M33/03/01	東大一覧の演習林関係記事表題が，北海道演習林の新設にともない「農科大學附屬演習林」になる (M32/33 東京帝國大學一覽, M33/34 同文)	
1902/M35/09/18	<p>篤志林業夫規則を制定，演習林で修業 (1913 林業実地見習と改称)</p> <p>代々木演習林，府中演習林新設</p> <p>東大一覧関係記事 (M35/36 東京帝國大學一覽 M35/12/15 発行, M36/37 同文)</p>	
1904/M37	<p>代々木演習林，府中演習林「東京府下ニ在ルモノハ 本學内林學實習地狭隘ヲ告ルニ到シテ以テ 本年民地ノ購入ニヨリ初メテ設置セルモノニシテ 即チ 府下豊多摩郡代々幡村大字代々木ニ約四町歩 及 府下北多摩郡府中町ニ約十五町歩トス 此等ハ其面積狭小ニ且ツ未立木地ナルヲ以テ之レヲ演習林トシテ完全ナル施業實習ノ用ニ供スルコト能ハス 即チ 主トシテ造林及間伐等ノ實習用ニ充ツルヲ目的トス」</p> <p>駒場構内面積 179,375 坪，農場建物，林学教室など建築中</p> <p>東大一覧ほか関係記事 (M37/38 東京帝國大學一覽, M38/39, 39/40, 40/41 同文, S44-45 東京大学一覽沿革略, 山林 278, 281)</p>	
1908/M41	<p>林学教室 (講義室，実験室，標本室) 新築，林木苗圃に造林学実験室，造林学実習場，駒場構内面積 179,375 坪</p> <p>東大一覧関係記事 (東京帝國大學一覽 M41/42 M41/12/24 発行, M42/43, 43/44 44/45, T01/02 同文)</p>	
1913/T02	<p>農科大學附屬演習林「府中演習林，實習用ニ充ツル目的ヲ以テ造林ヲナシ現今ニテハ大部分造林ヲ爲シタリ」</p> <p>東大一覧の記載内容変更 (T02/03 東京帝國大學一覽 T03/01/15 発行, T03/04, 04/05, 05/06, 06/07, 07/08 同文)</p>	
1919/T08	<p>林木苗圃「一町三反歩，學生生徒ノ造林學實習ノ用ニ供シ 又内外國産各種ノ樹苗ヲ造リ播種及生育上ノ試験ヲ爲ス 目下内國産樹種四百餘種 外國産樹種八十餘種ヲ存ス 苗圃内ノ一隅ニ造林實習室並ニ器具室等ノ建物アリ 器具室ニ接シテ見本用外國産樹種鉢置場アリ 濠洲及印度産樹種百餘種，南北亞米利加産樹種七十餘種，歐洲，阿弗利加及小亜細亞産樹種五十餘種アリ」</p> <p>林木見本園「一町四反歩，内外國産有用樹木ヲ植栽シ造林學並ニ森林植物學實習ノ用ニ供ス 内國産樹種四十餘種，外國産樹種六十餘種——」</p> <p>農科大學附屬演習林：代々木・府中所在演習林「演習林トシテ施業實習ノ用ニ供スル能ハス 依リテ前者ニハ内外國産重要樹木約七十種ヲ以テ各五畝〜一反ノ見本林ヲ造成シ，後者ニハ杉ヲ主トシテ其他内外國重要樹木十一種ノ小規模造林ヲ施行シ，以テ林木ノ造成，撫育並生長ニ關スル試験ヲ行ヒ，傍ラ學生，生徒ノ實習ニ供スルコトトセリ」</p>	
1923/T12	<p>東大一覧の記載内容変更 (T08/09 東京帝國大學一覽, T09/10 同文)</p> <p>林木苗圃「一町三反歩，内外國産樹種數百種」(要点のみ)</p> <p>林木見本園：T02/03 と同じ</p> <p>見本林：この年度から記載なし</p> <p>林學科列品室「林業用具數百點」(要点のみ)</p> <p>従来は農場，苗圃，植物園等の項目の中に，農場，農芸化学科試験田圃，林木苗圃，林木見本園，見本林，植物園と並んでいたが，これ以降，見本林の記述が消える，なお植物園 1.8 町歩は，樹木植物園と草本植物園で構成されている</p>	
1926/T15/08/02	<p>東大一覧の記載内容変更 (T12/13 東京帝國大學一覽)</p> <p>林木苗圃「約二町歩」(要点のみ)</p> <p>林木見本園「内國樹種百四十餘，外國樹種六十餘」(要点のみ)</p> <p>駒場構内造林学関係屋外施設および代々木演習林廃止 (前田邸敷地として，本郷赤門地区との土地交換による)</p>	

付表-1 続き

年/月/日	事項「原文」	(出典)
	東大一覧の施設の記載内容が短縮 (T15/S02 東京帝國大學一覧) 林木苗圃「二町歩、内外國樹種合わせて數百種」(要点のみ) (植物園: 1.81 町歩) 駒場構内面積 139.375 坪 (40,000 坪減は前田家との交換分)	
1929/S04/10/31	田無苗圃 (または多摩苗圃) 発足	
1930/S05	東大一覧の田無苗圃に関する記述 (S05 東京帝國大學一覧, 発行日記載なし) 「林木苗圃及樹木園ハ東京府北多摩郡田無町ニ面積凡九町歩アリ 學生生徒ノ實習及各種ノ造林試験ノ用ニ供シ 又内外國産樹木ヲ植栽シテ樹木園ヲ造成シ教材ニ資セントス」 (S08, S11, S18-27 同文, ただし S18-27 では平仮名口語文になる)	
1935/S10/04/01	実科が独立して東京高等農林学校となる	
08/01	府中演習林廃止 (東京高等農林学校へ所属換)	
1956/S31/04/01	演習林による管理運営開始	
1957/S32/04/01	農学部から演習林へ管理運営につき正式な委嘱があり, 名称が「農学部附属演習林田無苗圃」となる	
1962/S37/12/01	名称を「農学部附属演習林田無試験地」と改称 東大一覧に掲載された田無苗圃としての最終の記述 (S36-37 東京大学一覧 S37/10/15 発行) 「田無苗圃は都下田無町にあり, 面積は九ヘクタールである. 主として, 育苗およびこれに関連した育種試験を行っている. 学生の苗畑実習は, この苗圃で実施されているほか, 小規模ながら内外國産樹木を植栽して教材に資している.」	
1963/S38	東大一覧に演習林田無試験地としての記述始まる	
1969/S44	東大一覧最終号に掲載の田無試験地に関する記述 (S44-45 東京大学一覧, 発行日記載なし) 「田無試験地は都下田無市にあって, 面積は約9ヘクタールである. 主として林木育種および育苗に関する生理学的研究を中心とし, これに関連した育苗および病虫害防除試験を行なっている. ここでは学生の苗畑実習と卒業論文作成のための試験研究が実施されているほか, 數百種の内外國産樹木を植栽して教材に資している.」	

表中の太字表記は著者らによる

付表-2 林学苗圃など駒場野外施設利用の研究業績

著者名 (発表年)	表題	誌名	巻号ページ	[樹種, 内容など]
守屋物四郎 (1894):	本邦産炭材乾餾試験成績 (第一), 農科大學學術報告彙報 1: 703-725			[駒場構内産のクヌギ, コナラ, シラカシ, アカガシ, ナラガシ, シイノキ, オオナラ, ケヤキ, アカマツ, エゴ, シオジ, アキニレ, ゴンズイなども材料に]
守屋物四郎 (1894):	同上 (第二), 同上 1: 726-742			[駒場構内産のアカマツ, カワヤナギ, クリ, クヌギ, コナラ, ホオノキ, アブラチャン, ミズキ, エゴノキなども材料に]
守屋物四郎 (1894):	同上 (第三), 同上 1: 743-760			[駒場構内産のクヌギ樹幹, 上, 中, 下部が材料]
LOEW, Oscar & HONDA, Seiroku (1896):	Ueber den Einfluss wechselnder Mengen von Kalk und Magnesia auf die Entwicklung der Nadelbäume, 農科大學學術報告 (The Bulletin of the College of Agriculture, Tokyo Imperial University) 2: 378-386			[駒場構内, 砂耕, スギ, ヒノキ, アカマツ, 2ヶ年にわたる実験]
HONDA, Seiroku (1896):	Besitzen die Kiefernadeln ein mehrjähriges Wachstum? 農科大學學術報告 2: 391-398			[Pinus longifolia, P. koraiensis, P. densiflora における葉の伸長成長の季節変化]
三村鐘三郎 (1898):	論叢, 樟葉採脳談, 林學士會報告 2: 1-11			[構内標本園西園, 東園, 用材園から材料採取]
LOEW, Oscar & HONDA, Seiroku (1904):	Ueber den Einfluss des Mangans auf Waldbäume, 農科大學學術報告 6: 125-130			[スギ]
三村鐘三郎 (1906):	殻斗類及櫟其他五倍子, 單寧, 第一回試験報告 (林試報告 3), 山林 283: 35-37			[材料の一部, 駒場から]
近野英吉 (1909):	新式土龍取器の効果, 山林 315: 33-34			[苗圃の広さ 2 町歩, もぐらとり 1ヶで 8月 9日から 9月 12日までに 25頭, 3ヶに増やして 9月 13日から 10月 19日までに 69頭採取]
近野英吉 (1909):	移植器と床替法, 山林 317: 31-34			
近野英吉 (1909):	杉扁柏造林上注目すべき新事實と吾人の研究, 山林 323: 9-11			[スギ, ヒノキ種子の土中埋蔵貯蔵により 2年後も正常に発芽]
近野英吉 (1910):	苗圃に於ける播種法の改良に就て, 山林 327: 1-7			[駒場苗圃における條播法の利益]
宮下保雄 (1916):	驚ク可キ松苗ノ根, 山林 406: 9-11			[アカマツ, クロマツ, 外国産マツを鉢植えにして, 直根の成長を調べる]
佐藤敬二 (1930):	スギの染色體數に就て, 日林誌 12: 396-399			[千葉演習林七曲品種試験地から材料を採る, これは近野英吉が駒場苗圃へ 1908年播種, 3年生苗を千葉演習林に植栽したものの]

付表-3 府中演習林研究業績

著者名 (発表年)	表題	誌名	巻号ページ	[樹種, 内容など]
近野英吉 (1910):	平地の杉林 (四谷丸太式林業), 山林 331: 11-16, 332: 3-11, 333: 1-5			[府中演習林が調査地のひとつ]
三浦伊八郎 (1920):	府中演習林ニ於ケル「クヌギ」毛蟲ノ驅除試験, 東大演報 1: 63-66			
三浦伊八郎・西田屹二 (1921):	改良製炭法調査成績, 山林 469: 1-151			[クヌギ, コナラ, クリ, エゴノキ, ハンノキ, ネム] (同上単行本, 改良製炭法 (黒炭窯) 比較試験調査書, 155 p. 大日本山林會)
三浦伊八郎 (1923):	冬期にクヌギ毛蟲の驅除法, 山林 482: 39-43			
三浦伊八郎 (1924):	製炭窯の木醋酸中の醋酸及メチルアルコールに就いて, 山林 496: 25-47			
三浦伊八郎・内藤三夫 (1940):	武蔵野に於ける矮木の収穫及び下草・落葉採取に就て, 東大演報 28: 1-50+4pl.			[大正 8年から昭和 9年にいたる 16年間の区画試験調査]